
人生終了のお知らせ 社会的地位なくしては、俺たちは生きてはゆけない

上上 上

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人生終了のお知らせ 社会的地位なくしては、俺たちは生きてはゆけない

【Nコード】

N5530Z

【作者名】

上上 上

【あらすじ】

この世に生きる人間たちは、次々と人生終了のお知らせを受けてゆく。それは社会的地位の消滅であったり、社会的地位の消滅だったり。 これは、そんな者たちの死に様を描いた物語。

感想とか評価とかしてくれると嬉しいです。

ブローグ「セクハラ男」

ああ、やつちまった。

俺は人間失格だ。

何故かって？

聞きたいか？

おっぱいを揉ましてくれたらいいぜ。

え？「俺は男だ」って？

そりゃ失敬。

って……、またやつちまった。

俺は今こういうセクハラ発言が訴えられて、警察のご厄介になっているところなんだ。

クソッ、通りすがりの美人女性に「パンツは何色ですか？」と訊いただけでこうなるなんて、嫌なご時世だぜ。

だいたいあんな短いスカートなんか履いてるから悪いんだろうが！！

男を挑発しやがって！！

まあ、俺も悪かった事は認めよう。

だがお前ら女共が挑発するから、こんな事になったんだからな！！これに懲りて、俺がムラムラするようなファッションをするんじゃないぞ！！いいな！？

って、ああ……。まただ。

こうやってセクハラで訴えられて、逆ギレして、また訴えられてこのループが止まらないんだ。どうすりゃいいんだよあ……。

……結局、罰金とられたし……。

まあ、懲役何年とかにならなかっただけ、よかったとするか。よし！！

気分を入れ替えよう！！

まずは巨乳美女を見ないと気分を入れ替えられない。

お。

美女はっけーん。

俺のセンサーが反応してるぜ。

っていうかスカート短エ。

うーん……。

パンツ、何色だろう。

よし、じゃあ。

単刀直入に聞いてみるか！！

終わらない、エンドレスなループ。

それには絶対的な力が働いていて、抗う事は出来ない。

運命で決まっているのだ。

こんな人生でいいのかって？

そりゃ、いいわけが無い。

何回も何回も警察の御厄介になって、それでも運命は変わらない
くて。

自分に嫌気が差すさ。

でも、どんなに自己嫌悪しても、どんなに抗おうとしても、
変えられない物は変えられない。

俺はそれを知っているから、だから。

もう割り切って、自分の本能に従おうと思う。

今日も世界は廻ってる。

一人の男が、セクハラを続けながらも。

セクハラした相手が、友達のお姉さんでも。

セクハラ男の社会的地位

E N D

それから一カ月後。

友達は、自分の姉をセクハラされた怒りにより、セクハラ男をネット上に晒しあげた。

人生終了のお知らせを通達されたセクハラ男は、
今もムシヨの中でくさいメシを食ってるという……。

第一話「全ての始まり」

砂埃が舞う荒野を背景に、二人の男が対峙していた。

一人目の男は、温厚そうな顔だが、今は目には強い決意を帯びて、口も閉じている日本人だ。

白い柔道着を着ていて、その隙間から筋肉が覗いている。

20代前半だというのに、飾りつけはまったく無く、髪の毛も全然染めていたりしていない黒髪だ。

対するもう一人は、柔道着の日本人とは対照的にキツイ目つき、口元にも笑みを浮かべているアメリカ人。

ファッションセンスも凄いが、筋肉も凄かった。

柔道着の日本人とほとんど変わらない、もしくはそれより凄い筋肉。

背も日本人より高く、上から見下ろすような形になっていた。

荒野の風が、彼の金髪を揺らす。

その時、突然『すりー、つー、わん、……』とカウントダウンが始まった。

そして、『れえでいいい ふああああいいとおおおお
おお』とやたらテンションが高い声が聞こえる。

すると対峙する彼らは、互いに向い一気に駆けだした。

まずアメリカ人が、日本人との距離約3メートル程のところでジャンプする。

空中を日本人に向かって飛んでいるアメリカ人は、容赦無く飛び蹴りをかます。

だが日本人はそれを両手をクロスしてガードし、そのまま脚を掴んで振り回した。

十分なスピードが付いたところで、脚を離す。

ブワッと空中を浮いたアメリカ人は、器用に体を空中で回転させ、見事に着地した。

だが着地した時には日本人は既に拳を振りかぶっている。

物凄いスピードでアメリカ人に吸い込まれてゆく拳は、アメリカ人の飛び蹴りと同じように容赦の欠片も無い。

ドゴォー！！ と聞こえてきそうな程上手く決まったパンチをした日本人は、すぐに第二撃目の準備をする。

が、アメリカ人の脚が日本人に向かっていた。

靴のつま先が日本人の顎に叩き込まれた。

日本人は威力に耐えられずよろめく。

アメリカ人は殴られたダメージを感じさせぬ程のスピードで、第二撃、第三撃目を加えてゆく。

左アッパー、右アッパー、左アッパー、右アッパー……と、何故かアッパー限定で攻撃を加える。

日本人のHPはどんどん減り、最後の一撃とばかりに右ストレートを食らったところで0 - z e r o - になった。

「だア ツー！ くそツー！」

俺はコントローラーをクッションに投げつける。

クッションに激突したコントローラーは、やや左に跳ね返りちゃぶ台の上の緑茶に当たって、熱々のお茶を撒き散らしたところで落ち着いた。

「危ねツー！」

俺は慌てて湯呑みを抑えようとしたのだが、間に合わなかった。

「クソオ……」

もうこのゲームは飽きた。

処理速度は遅いし、グラフィックは悪いし、しかもゲームバランスおかしいし。

イライラを隠せない俺はテレビゲームの電源を切り、代わりにパソコンの電源を点ける。

部屋が小さいので動かずとも電源を点けた。

だが、このパソコンももう古いので起動速度があまりにも遅い。
ウィーン……と冷却ファンが、今はとてもイライラする。

物にあたっても仕方ないというのに、どうしても物にあたってしまつのは俺の悪い癖だ。

思わずふすまに拳を叩き込んでしまった。

思いつきり凹んだふすまは、中に収納されている物を雪崩のように畳に落としながら、その物たちの上に倒れた。

「あ……」

片付けるのが、また面倒くさい。どうしよう。

と、この惨事の原因、パソコンがやっと起動した。

俺はとりあえずネットサーフィンでもして時間を潰そうと思う。
インターネットのアイコンをダブルクリックし、表示されるのを待つが、どうせ遅いのはもう分かっているので、心を落ち着けつつ雪崩の処理をする事にした。

「酷い……」

買っただけで、全然使っていないものがたくさんあった。

今では何故こんな物を買ったんだ、あの時の俺よ……と思うような物が盛り沢山。

はぁ、とため息をつきながら、それらを押入れの中に押し込んでいく。

三分の一の物を押し込み終わり一息ついた隙にもう一度雪崩が起き最初の状態に戻った時、ふと一つの箱が目についた。

電気屋で購入したウェブカメラ。

ライブチャットするぞと意気込んでいたのだが、その時丁度パソコンが破損し、修理に出してしまいすっかり忘れてしまっていたのだ。

そもそもまだ高校生の俺にはアダルトサイトはアクセス出来ないし。

だけど何か色々使えるかもしれない。

自作監視カメラとか。

ウェブカメラを手に持ったまま俺はパソコンの前に戻った。
と、yafooニュースが更新され、新しいニュースが表示されている。

その中に面白い一文を発見した。

“友人の姉をセクハラし、ネットに個人情報晒される”

俺は吹き出しそうになったが、ギリギリでこらえる。

こらえてから、別にこらえる必要無いじゃんと思ったが。

とりあえず後で見ようと思い、別のタブに表示させておく。

砂時計が無くなり、やっと自由に動き回れるようになった俺のマウスを移動させ、yafooの検索エンジンに『ウェブカメラ』と打った。

Enterキーを押す。

そして数秒後（動作遅い）には様々な検索結果が表示されていた。
一番上に表示されたwikipediaをクリックして開く。

ふむふむ、分かん。もっと分かりやすく書いてくれよ。

そもそも俺はウェブカメラの何を分かつとしているのだ？

分からないまま読み進めるうちに、色々な使い道がある事を知った。

yafooメッセンジャー、Google Talk、Skype、
yootube、ニカニカ動画の生放送……などなど。

中でも俺はニカニカ生放送が気になった。

生放送。なんだかカッコイイ。

ニカニカ動画自体は知っている。

アカウントも実は持っている。

しかし最近アクセスしていない事を思い出し、久しぶりに行って
みる事にした。

ニカニカ生放送のユーザー放送はミレニアム会員じゃないと出来ないらしい。

ミレニアム会員は月525円だと。

ちと高い。

だが、ミレニアムチケットというのもあるらしく、試しにそれでミレニアム会員になってみようかなと思う。

だって生放送やってみたいんだもん。

俺は、テレビゲームにも飽きてきてる。

新たな刺激が欲しかった。

「……やってみるか……」

俺は登録手続きの画面に移動した。

第一話「全ての始まり」（後書き）

y a f o o（笑）。

G o g l e（笑）。

二カ二カ動画（笑）。

何か色々違います（笑）。

本当は一話完結みたいな感じにしたかったんですが、もう疲れたんで続きはまた今度……と、いう事で。

最初のゲームの描写は別に必要無いんじゃない？ と思う方も居るとおもいますが、ていうか实际需要りませんが、なんとなくバトルシーンっていうのもやってみたかったんです！！

今は反省してます。

第二話「アキバハラ48、ベビーローテーション」

登録手続きと言っても、もうアカウント自体は持っているので、ミレニアム会員の手続きだ。

webuマナーというものでチケットとやらを買い、それで90日間ミレニアム会員になれる。

webuマナーはファミリアマートなどのコンビニで購入出来るらしい。

俺の家の近くにあるのですぐに買いに行ってきた。

さあ、後はこのwebuマナーでミレニアムチケットを買いただけだ。

webuマナーの番号を入力し、決定ボタンをクリックする。

よし、ミレニアム登録完了。

けっこう簡単だったので、少し拍子抜けした気分になる俺だが、これで生放送とやらが出来る。

あれ、ちょっと待て。

生放送ってどんなのを放送すればいいんだ？

勢いに乗ってミレニアム登録してしまったが、焦って放送事故なっていてしまったら、恥ずかしすぎてアカウントを削除してしまうかもしれない。

ちゃんと前情報を収集しなければ。

そう思い、生放送のページに移動した俺は、適当なタイトルをクリックした。

画面が表示される。

既に放送開始から1時間程経っているようで、コメントもかなりいい感じになっている。たぶん。

おそらくこれは公式の生放送だろう。

ちよつと見るが、なんだかよく分からないので戻るボタンを押す。やっぱりこういうのは最初から見ないとダメだな。

と、いう事で、新着ユーザー放送の中から適当に一つ選ぶ。映像が表示されると、よく分からない人が踊っていた。

これは俗にいう『踊ってみた』というヤツなのだろうか。

画面の向こうで踊っている人物の踊りは、けっこう上手かったのだが、俺の方が上手く踊れる気がする。

実は俺はちよつとダンスをかじっているのだ。

まあ、経験者の俺から言わせれば、この踊り手はクズだね。

だが意外と人気があるようで、まだ始まって数分なのに、けっこうな人数が見ているようだ。

アンチや信者もいるようで、なんだか賑わっていた。

もし、コイツじゃなく自分が踊ったらどうなるだろうか。

たぶん、俺のほうが出るところだろう。

だって俺のが上手いもん。

だが顔出しでやっても大丈夫だろうか？

高校では、どっちかと言うとおとなしい系のグループにいる自分が、こんなところで踊っているのを公開してクラスの奴らに見られたら、たぶん引かれるだろう。

限りある青春時代。

それをこんな事で壊してしまったら馬鹿みたいだ。

いやでも、この画面の向こうの俺より踊りが下手な人も、顔出ししているから、けっこう大丈夫なのだろうか。

……ちよつと、やってみようかな。

準備はGoogle先生のおかげですぐ整った。

後は生放送の時間が来るのを待つだけだ。

生放送開始の時間は午後10時。

現在午後9時。

後1時間。

長い！！

1時間もこうやって緊張して固まりながら待たないといけないのか！？

ちよつと予行練習に踊ってみるか。

パソコンからビデオを流す。

曲はAKB48（アキバハラ48）の『ベビローテーション』。

女性アイドルグループの曲だが、まあ別にいいだろう。

服装は、AKB48（アキバハラ48）の衣装に似せた物。

高校の文化祭でクラス全員で踊ったのだ。

だから振り付けも完璧（たぶん）なので、この曲にした。

パソコンのスピーカーからポップ調の音楽が流れる。

ちなみに歌詞を歌ってしまうと、俺の音痴さに視聴者のみなさんも、顔を歪めると思いますので、やめさせていただきます。

部屋の荷物を別の部屋に押し込み、踊るスペースを作った狭い部屋で、くるくる踊る。

所々間違えながらも、全部踊れた。

後は間違えたところを、映像を見ながら微妙に直していく。

まあちよつとぐらい間違えたって別にいいと思うけどね。

問題は男が踊っているのを気持ち悪がられないかどうかだ。

十中八九気持ち悪がられるだろうが。

まあそれはネタだしいいか。

他の問題は、ベビローテーション以外に何を踊るかだ。

最近の曲で踊れるのは、ベビローテーションぐらいしか無い。

ああ、無計画だなあ。

まあ今更悔やんでも仕方が無い。

その時はその時で適当になんか踊るか。

リクエストにも応えたりしようかな。

さあ、そんなこんなで午後9時59分59秒。

一気に時間が飛んだけど、細かい事は気にしない！！

後1秒で生放送開始。

って、ああもう始まってたわ。

でもまだ誰も来てないからいいよね。

じゃあ誰か来るまでこの生放送の詳細を話そうか。

『タイトル：なんか色々踊ってみた。説明：なんか色々踊ります。初めてですがよろしく願います。』

以上。

俺はこういうタイトルとか決めるのが苦手なんだよ。

おっと、いつの間にか数人が来ている。

ちよっとカメラのマイクに声を出してみよう。

「あゝ、マイクのテスト中。聞こえましたら適当にコメントしてください」

言い終わり、数秒後、ちゃんと聞こえたようでコメントが返ってきた。

『聞こえてますよ』

『つてか主イケボw顔はともかくw』

失礼な。

『歌うんですか？w』

おお、それなら歌ってもいいかもしれない。

そんな事を思ってしまったばかりに、

「歌います」

と、言ってしまった。

言ってから、歌詞ほとんど分かんねえじゃん、と気付く。

『おおw踊ってしかも歌うんですかww』

ああ、もう後戻り出来ねえや。

ま、俺の音痴もネタとして受け取ってくれたらそれでいいけどね。

『すげえw』

『楽しみw』

『つてかいつ始まるの？』

おっと、もうそろそろ始めないと、視聴者が待っているな。

来場者数はそんなに無いが、コメントはけっこう賑わって来ている。

俺は一つ深呼吸をし、

「それじゃ、行きまーす!!」
と宣言した。

それが死の宣言だとも知らずに。

第二話「アキバハラ48、ベビーローテーション」(後書き)

アキバハラ48、ベビーローテーション。

微妙に変えてるぜ!!

この二つはパツと見どう違うのか分かんねえだろ!?
頑張つて考えたぜ!!

第三話「スツキリとした気分でゲームをプレイしよう」

パソコンに、生放送の画面とは別に、アキバハラ48の踊ってる動画を表示させる。

その際、録音されている歌声も聞こえてくるが、俺の声でかき消せばいいだろう。

「1、2、1234!!」

俺はけっこう大声で叫ぶ。

そして音楽が始まった。

急いで片付けた部屋の中で踊る。

衣装もちゃんとアキバハラ48のフリフリな女物を着ているので、何だか恥ずかしい。

ちなみにスカートの中はトランクスです。

「今パンツ見えたww」

このコメントは見なかった事にしよう。

「歌は下手だけど踊るの上手いww」

褒められて、ちよつと嬉しくなる。

この生放送を視聴してる人は、ニカニカしてくれているのだろうか。

ニカニカしてくれていたら嬉しい。

なんだか「w」とかのコメントが増えた気がする。

これはニカニカしてくれている証拠だろうか。だったらいいな。

「ベビィ、ロォ テェ ショ ン」

最後まで歌いながら踊りきり、ふう、と一息つく。

「おつかれー」

「乙」

などのコメントも見られた。

俺が踊っている間にもけっこう来たようで、かなりの来場者数に

コメント数だ。

「はあ、疲れた」

俺は思わずつぶやく。

そして、ハッと思い出す。

……次、何踊ろう……。

ベビーローテーション以外には考えていなかったもので、はっきり言ってヤバイ。

この状況をネタ切れというのか。

しかしまだ開始してから7分程しか過ぎていない。

生放送は全部で30分。残りの23分は何をしようか。

俺の心境とは裏腹に、コメントはどんどん賑わっているようで、

『次、何踊るのー？』

とかコメントしてる輩もいる。

「何か踊って欲しいの、リクエストとかありますか？」

俺は苦し紛れにそう訊いてみた。

『何かって言われても、主さんが知ってるかどうか分からないし』

「分からなかったら、アドリブで踊ります」

うん、それがいい。

『じゃあ、初音ミクの『ミックミクにしてあげる』がいい』

それは俺でも知っている。

けっこう有名だろう。

「じゃあ、『ミックミクにしてあげる』をアドリブで踊ります。そ

れの音楽を流しますので、ちょっと待ってください」

それから1分程経って、準備が整った俺は、

「開始します」

と声をかけ音楽を流した。

「ふう」

30分の生放送が終わり、俺は額に滲む汗を拭う。

もうちょっとでクリスマスだが、部屋の中は暖房を入れているので、運動すると暑かった。

生放送を終えた俺は、手応えを確かに感じていた。けっこう反響も良かったし、このまま生放送を続けていれば、俺のユーザー名の大百科記事が出来るかもしれない。

大百科とは、ニカニカ大百科と言い、ミレニアム会員は自由に記事編集出来る。

自分で作るというのもアレなので、ファンと記事が出来るのを楽しみにしておこう。

「ちよつとゲームでもしようかな……」

ここから下は読み飛ばしてもらって構いません。

砂埃舞う荒野。

因縁の二人が対峙していた。

彼らは何度も何度も戦ってきたが、今まで決着が着かず、ここまですべて二人とも死なないでいたのだが、今回でどちらかが死ぬのは明白だった。

日本人の手には、スタンガン。バチバチと火花が散り、電圧の高さがうかがい知れる。

アメリカ人の手には、刃渡り20センチ程のナイフ。アレで刺されれば無事では済まないだろう。

何だかどっちも卑怯な気がするが、仕方無い。

人生は不条理極まりない、そんなものなのだ。

つまり、相手が武器を持っていたって、仕方の無い事なのだ。

まあ今回はどっちも持つてただけいいじゃないか。

と、いう事で戦いが始まった。

まずアメリカ人がナイフを前に突き出し走り出した。対して日本人は受けの構え。

アメリカ人は走りながらナイフを一閃。

しかし日本人はギリギリでそれをかわす。

かなり危なかったが、ギリギリでよけたのはわざとだ。

ギリギリでよける事により、無駄な動きを取らないで済む。

そしてまったく無駄の無い動きで、スタンガンをアメリカ人に押

し付けた。

「グギュアアアアアアアアアアアアアアアアツツツ！」

アメリカ人は悲鳴を上げ、気絶した。

だが、まだアメリカ人のHPは残っている。

日本人は舌なめずりし、拳を握り締めた。

読み飛ばすのはここまでです。

「わお……！！」

スッキリした気分です。今までクリア出来なかったゲームをプレイすると、ちゃっかりクリア出来た。

凄、凄、二カ二カ生放送。

二力生のおかげであの無理ゲーをクリアする事が出来た！！
感謝するよ。二力生。

なんだかんだで、俺はまた生放送をしようと思う。

*

暗い部屋の中で、一人の少年が驚愕していた。

「今の……！」

たまたま見た二力二力生放送。

そこに映っていたのは……

*

翌日。

月曜日。

学校に行くのが憂鬱だ。

だって寒いし。眠いし。

まあ内申が悪くなつては困るので、イヤでも行くけど。

急いで準備をして、家を出る。

寒空の下、早足で高校への道に行く。

「道中は割愛します」

俺は教室の扉を開ける。

「……」

俺は黙って教室に入るが、クラスメートたちも黙った。

喋っていた人も、歌っていた人も（教室で歌うな）、踊っていた人も（教室で踊るな）、PSPの新しいやつで対戦してた人も（学校にゲーム持ってくるな）、プリンを取り合っていた人も（おやつを持ってくるな）、一瞬にして沈黙する。

「……？」

何故黙る？

俺が何かしたか？

「あの……阿部くん……」

何故敬語？

そして何故俺と目を合わそうとしない？

ちなみに阿部は、今考えた俺の仮の名前です。

「さっき聞いたんだけど……」

「ん？」

「二カニカ動画で踊っていたって……本当？」

第三話「スッキリとした気分でゲームをプレイしよう」 （後書き）

間のゲーム描写は別に必要無いんじゃない？ と思う方もいると思いますが、大丈夫です。俺も必要ねえかもと思ってます。

第四話「言い訳」

「ニカニカ動画で踊っていたって……本当？」

……。

クラスメイトからの視線が痛い。

「え……と」

全員から注目を浴び、ここまで注目されたのは生まれて初めてなので、上手くしゃべれない。

「……」

「……」

一瞬沈黙し、話そうと口を開けたとき、
ガラッ

「ホームルーム始めるぞー」

硬直した空気が動き出した。

俺に注目していたクラスメイトたちも席に座る。

「何してるんだ？ 阿部（仮名）」

先生に言われた俺は、急いで席に着席した。

どうしよう。

ニカ生で踊った事がバレてしまった。

しかも女性アイドルのフリフリドレスを着て。

これは恥ずかしいぞ。かなり。

どうやって言い訳しよう。

あれは俺じゃないと言い張るか？

そうだ、それがいい。

そんなに画質もよくないだろうし、見間違えだと言い張れる。
生放送だから、後から確認も出来ないし。

よし、これでいこう。

チャイムが鳴り、一時間目の授業が終わった。

「おい、阿部（仮名）、二カ二カの事、どうなんだよ？」

「えと、あれは……俺じゃないよ」

考えていた通りの事を言う。

「やっぱりな。お前なんかが踊りを踊れるワケ無いもんな」

話しかけてきた男子は、ため息をついて、自分の席に戻っていった。

何だかムカツクが、バレてはいけなかったので我慢だ。

そして他にも事情を聞いてきたクラスメイトに、同じ事を言った。皆、一様に納得し、自分の席に戻る。

これで大丈夫、一件落着。

そう思っていた。

この時まで。

*

「阿部（仮名）はなんて言ってた？」

昨日二カ生を見て、それをクラスメイトたちに広めた張本人である少年が訊く。

「『あれは俺じゃ無い』ってさ」

答えたのは、本人に訊いてきた生徒。

「そうか……」

（いや、ちょっと待てよ？ 『あれは俺じゃ無い』って事は、まるで二カ生を見ていたようじゃ無いか……）

*

第四話「言い訳」(後書き)

今回はちょっと短いですが、
たぶん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5530z/>

人生終了のお知らせ 社会的地位なくしては、俺たちは生きてはゆけない

2011年12月31日16時45分発行